

令和2年度決算に基づく健全化判断比率等

「地方公共団体の財政の健全化に関する法律」(平成21年4月施行)の規定により、令和2年度決算に基づく健全化判断比率と公営企業ごとの資金不足比率を算定しましたのでお知らせします。

実質赤字比率と連結実質赤字比率は前年度同様に生じない状況ですが、実質公債費比率は依然として財政再生基準を超えており、今後も財政再生計画に基づいて着実に財政運営を進めていかなければなりません。

公営企業全会計についても前年度同様に、資金不足比率が生じない状況となりました。

○健全化判断比率

(単位:%)

指 標	夕 張 市	早期健全化基準	財 政 再 生 基 準
実質赤字比率	—	15.00	20.00
連結実質赤字比率	—	20.00	30.00
実質公債費比率	70.0	25.0	35.0
将来負担比率	336.0	350.0	— (注)

※注)将来負担比率には財政再生基準はありません。

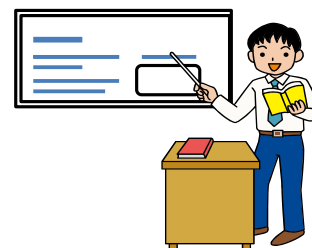
※実質赤字比率、連結実質赤字比率は黒字決算もしくは収支均衡であり赤字が生じないため「—」で表示しています。

○資金不足比率

(単位:%)

会 計 名 称	夕 張 市	経営健全化基準
市場事業会計	—	20.00
公共下水道事業会計	—	
水道事業会計	—	

※いずれの会計も資金不足が生じないため「—」で表示しています。



比 率 の 説 明

★ 実質赤字比率：標準財政規模に対する一般会計の赤字額の割合

(この比率が高くなるほど、赤字の額が大きく解消が難しくなるので、より多くの歳出削減策や歳入増加策を講じるとともに、解消期間も長期に渡る可能性が高くなるなど、深刻な事態になっていることになります。)

★ 連結実質赤字比率：標準財政規模に対する全会計の赤字額の割合

(全ての会計の赤字額や黒字額を合算し、まち全体の赤字の程度を指標化したものです。)

★ 実質公債費比率：標準財政規模に対する公債費等の支出の割合

(公債費や公債費に準ずる経費は、削減や先送りが難しく、一度この経費が増大すると短時間で解消することが困難になります。そのため、この比率が高まるほど財政の弾力性が低下し、他の経費を削減しないと予算を組むことが難しくなるなど、資金繰りの危険度を示すものです。)

★ 将来負担比率：標準財政規模に対する将来負担すべき額の割合

(赤字額や地方債、債務負担行為など現時点で想定される将来の負担(残高)を指標化したものです。この比率が高い場合、今後の財政運営が圧迫されるなどの問題が生じる可能性が高くなります。)

★ 資金不足比率：事業規模である料金収入に対する資金不足額の割合

(この比率が高くなるほど、料金収入で資金不足を解消することが難しくなり、公営企業として経営に問題があることになります。ただし、将来の料金収入などで解消することが予定されている資金不足については、計算上、差し引くこととしているため、資金不足額イコール赤字額とはなりません。)

増減要因

○健全化判断比率

(単位:%)

指 標	令 和 2 年 度	令 和 元 年 度	増 減
実質赤字比率	—	—	—
連結実質赤字比率	—	—	—
実質公債費比率	70.0	69.9	0.1
将来負担比率	336.0	399.7	△ 63.7

○資金不足比率

(単位:%)

会 計 名 称	令 和 2 年 度	令 和 元 年 度	増 減
市場事業会計	—	—	—
公共下水道事業会計	—	—	—
水道事業会計	—	—	—

★ 実質公債費比率(0.1ポイント増)

実質公債費比率は、平成30年度から令和2年度の3ヶ年平均の値であり、対前年度比0.1ポイント増となりました。単年度の比率については、令和2年度が68.6%となり、前年度の71.4%と比べ2.8ポイント減となりました。

この要因として、単年度比率においては、前年度と比べ令和2年度の元利償還金が増加したものの、算定から控除される(普通交付税で措置される)額も増加したため、全体として算入される元利償還金が減少したことによるものです。

また、3ヶ年平均比率においては、単年度比率が高い令和元年度を含んだ平均で算出されることにより、微増となるものです。

★ 将来負担比率(63.7ポイント減)

将来負担比率は、令和2年度が336.0%となり、前年度の399.7%に比べ、63.7ポイント減となりました。

この要因としては、一般会計などの地方債現在高が再生振替特例債の償還等で20億8千万円減少したことなどにより、将来負担額が前年度と比べ減少したことによるものです。

(参考資料)

実質赤字比率

$$\frac{\text{一般会計等の実質赤字額①}}{\text{標準財政規模}} \Rightarrow \frac{\blacktriangle 244,232}{4,673,651} = -5.22\%$$

※一般会計等の実質赤字額: 一般会計及び特別会計のうち普通会計に相当する会計における実質収支額(比率の算定に用いる赤字額は正の値で表示)
※標準財政規模: 地方公共団体の標準的な状態で通常収入されると見込まれる一般財源(市税や普通交付税など)の規模を示すもの

◆一般会計等の実質赤字額

(単位:千円)

会計名称	歳入総額 (ア)	歳出総額 (イ)	歳入歳出差引額(ア-イ) (ウ)	翌年度に繰り越すべき財源 (エ)	実質収支額(ウ-エ) (オ)
一般会計	12,206,183	11,723,619	482,564	238,332	244,232
計	12,206,183	11,723,619	482,564	238,332	244,232

①

連結実質赤字比率

$$\frac{\text{連結実質赤字額①+②+③+④}}{\text{標準財政規模}} \Rightarrow \frac{\blacktriangle 656,629}{4,673,651} = -14.04\%$$

※連結実質赤字額: 一般会計等の実質赤字額にその他の特別会計の実質収支及び資金不足・剰余額を合算した額(比率の算定に用いる赤字額は正の値で表示)

◆一般会計等以外の特別会計のうち公営企業以外の特別会計

(単位:千円)

会計名称	歳入総額 (ア)	歳出総額 (イ)	歳入歳出差引額(ア-イ) (ウ)	翌年度に繰り越すべき財源 (エ)	実質収支額(ウ-エ) (オ)
国民健康保険事業会計	1,188,739	1,188,739	0	0	0
介護保険事業会計	1,688,085	1,688,085	0	0	0
後期高齢者医療事業会計	213,230	211,070	2,160	0	2,160
計	3,090,054	3,087,894	2,160	0	2,160

②

◆公営企業会計(法非適用)

(単位:千円)

会計名称	歳入総額 (ア)	歳出総額 (イ)	算入地方債(注1) (ウ)	翌年度に繰り越すべき財源 (エ)	ア-イ-ウ-エ (オ)	解消可能資金不足額(注2) (カ)	資金不足・剰余額(オ+カ) (キ)
市場事業会計	2	2	0	0	0	0	0
公共下水道事業会計	227,912	227,912	0	0	0	0	0
計	227,914	227,914	0	0	0	0	0

③

◆公営企業会計(法適用)

(単位:千円)

会計名称	流動資産 (ア)	流動負債 (イ)	算入地方債(注1) (ウ)	ア-イ-ウ (エ)	解消可能資金不足額(注2) (オ)	資金不足・剰余額(エ+オ) (カ)
水道事業会計	469,931	58,144	1,550	410,237	0	410,237
計	469,931	58,144	1,550	410,237	0	410,237

④

※注1)算入地方債:建設改良費等以外の経費の財源に充てるために起こした地方債の令和2年度末残高

※注2)解消可能資金不足額:事業の性質上、将来の料金収入等で解消することが予定される資金不足額

実質公債費比率

$$\text{実質公債費比率} = \frac{(\text{地方債の元利償還金①} + \text{準元利償還金②}) - (\text{特定財源③} + \text{元利償還金・準元利償還金に係る普通交付税算入額④})}{(\text{標準財政規模⑤} - \text{元利償還金・準元利償還金に係る普通交付税算入額④})} = 70.0\%$$

(単位:千円,%)

区 分		平成30年度	令和元年度	令和2年度
地方債の元利償還金	地方債の元利償還金 (ア)	3,397,639	3,407,651	3,432,375
	うち繰上償還に係るもの (イ)	0	0	0
	(ア)-(イ)	3,397,639	3,407,651	3,432,375
準元利償還金	満期一括償還地方債の1年当たりの元金償還金に相当するもの a 1	82,491	82,491	82,491
	公営企業の地方債の償還の財源に充てたと認められる繰出金 a 2 (ウ)~(キ)	139,398	202,439	197,899
	水道事業の地方債の償還に充てたと認められる繰出金 (ウ)	6,785	77,938	78,647
	病院事業の地方債の償還に充てたと認められる繰出金 (エ)	0	0	0
	市場事業の地方債の償還に充てたと認められる繰出金 (オ)	0	0	0
	公共下水道事業の地方債の償還に充てたと認められる繰出金 (カ)	132,613	124,501	119,252
	観光事業の地方債の償還に充てたと認められる繰出金 (キ)	0	0	0
債務負担行為に基づく支出のうち公債費に準ずるもの a 3 (ク)~(コ)	0	0	0	

①

準元利償還金(続き)	土地開発公社保有土地の買い戻しに係る償還金	(ク)	0	0	0
	公営住宅の立替施行に係る償還金	(ケ)	0	0	0
	農業振興資金に係る利子補給	(コ)	0	0	0
	一時借入金利子	a 4	0	0	0
		a 1~a 4	221,889	284,930	280,390
特定財源	貸付金の財源として発行した地方債に係る貸付金の元利償還金	(サ)	0	0	0
	公営住宅使用料	(シ)	179,712	182,529	159,353
	都市計画税	(ス)	44,529	44,354	42,749
	夕張市財政再生支援対策費補助金	(セ)	52,263	46,630	40,912
	幸福の黄色いハンカチ基金繰入金	(ソ)	225	0	0
	浄化槽整備償還基金繰入金	(タ)	56	56	56
	財政再生計画調整基金繰入金	(チ)	36,757	47,492	63,504
		(サ)~(チ)	313,542	321,061	306,574
普通交付税算入額	事業費補正に算入された公債費	(ツ)	66,462	66,930	65,217
	災害復旧費等に係る基準財政需要額	(テ)	515,228	527,436	563,664
	密度補正により基準財政需要額に算入された元利償還金・準元利償還金	(ト)	2,476	2,493	9,824
		(ツ)~(ト)	584,166	596,859	638,705
標準財政規模	標準税収入額等	(ナ)	1,094,192	1,077,684	1,126,332
	普通交付税額	(ニ)	3,204,423	3,275,063	3,420,471
	臨時財政対策債発行可能額	(ヌ)	171,781	130,232	126,848
		(ナ)~(ヌ)	4,470,396	4,482,979	4,673,651
実質公債費比率(単年度)			70.03754	71.39926	68.58793
実質公債費比率(3ヵ年平均)			70.0		

将来負担比率

$$\text{将来負担比率} = \frac{\text{将来負担額①} - (\text{充当可能基金額②} + \text{特定財源見込額③} + \text{地方債現在高等に係る普通交付税算入見込額④})}{(\text{標準財政規模⑤} - \text{元利償還金} \cdot \text{準元利償還金に係る普通交付税算入額⑥})} = 336.0\%$$

(単位:千円,%)

区 分		令和2年度
将来負担額	一般会計等の年度末地方債現在高 (ア)	27,210,091
	債務負担行為に基づく支出予定額 (イ)	0
	水道事業の地方債の償還に充てたと認められる繰出金 (ウ)	1,218,429
	公共下水道事業の地方債の償還に充てたと認められる繰出金 (エ)	579,104
	退職手当支給予定額のうち一般会計等負担見込額 (オ)	1,100,187
	設立法人の債務等に対する一般会計等負担見込額(土地開発公社負債額) (カ)	0
	連結実質赤字額 (キ)	0
	(ア)~(キ)	30,107,811 ①
充当可能基金額	財政調整基金 (ク)	3,271,598
	減債基金 (ケ)	863,373
	復興再建基金 (コ)	5,779
	子ども・文化振興基金 (サ)	28,999
	シューパロダム建設対策基金 (シ)	14,441
	公の施設建設基金 (ス)	1
	社会福祉基金 (セ)	0
	幸福の黄色いハンカチ基金 (ソ)	1,052,615
	浄化槽整備償還基金 (タ)	109
	財政再生計画調整基金 (チ)	1,139,591
	夕張市石勝線代替輸送確保基金 (ツ)	633,986
	夕張市森林環境譲与税基金 (テ)	3,521
	奨学基金 (ト)	22,702
	土地開発基金 (ナ)	1
	介護給付費準備基金 (ニ)	91,303
	国民健康保険準備基金 (ヌ)	370,992
(ク)~(ヌ)	7,499,011 ②	

特定財源見込額	貸付金の財源として発行した地方債に係る貸付金の元利償還金	(ネ)	0
	公営住宅使用料	(ノ)	1,926,097
	都市計画税	(ハ)	221,159
		(ネ)～(ハ)	2,147,256
普通交付税算入見込額	地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額	(ヒ)	6,901,239
		(ヒ)	6,901,239
標準財政規模	標準税収入額等	(フ)	1,126,332
	普通交付税額	(ヘ)	3,420,471
	臨時財政対策債発行可能額	(ホ)	126,848
		(フ)～(ホ)	4,673,651
普通交付税算入額	事業費補正に算入された公債費	(マ)	65,217
	災害復旧費等に係る基準財政需要額	(ミ)	563,664
	密度補正により基準財政需要額に算入された元利償還金・準元利償還金	(ム)	9,824
		(マ)～(ム)	638,705
将来負担比率			336.0

資金不足比率

$$\text{資金不足比率} : \frac{\text{資金の不足額①}}{\text{事業の規模②}} = \text{---} \% \text{ ③}$$

※①: 連結実質赤字比率の算定において計算した公営企業会計における資金不足額

※②: (営業収益の額) - (受託工事収益の額)

※③: 平成30年度は全ての公営企業会計で資金不足が生じていないため資金不足比率は「-」で表示しています。

◆公営企業会計(法非適用)

(単位:千円,%)

会計名称	資金不足額 (ア)	営業収益 (イ)	受託工事収益 (ウ)	事業の規模(イ+ウ) (エ)	資金不足比率 (ア)/(エ)
市場事業会計	-	0	0	0	-
公共下水道事業会計	-	51,508	0	51,508	-

(注1)

◆公営企業会計(法適用)

(単位:千円,%)

会計名称	資金不足額 (ア)	営業収益 (イ)	受託工事収益 (ウ)	事業の規模(イ+ウ) (エ)	資金不足比率 (ア)/(エ)
水道事業会計	-	217,712	0	217,712	-

(注2)

※注1) 市場事業会計及び公共下水道事業会計は収支均衡であり資金不足比率が生じていないため「-」で表示しています。

※注2) 水道事業会計は、資金不足が生じていないため「-」で表示しています。